



ブラウブリッツ秋田は、日本プロサッカーリーグ（Jリーグ）のJ3リーグに参加するプロサッカーチームである。前身はTDKサッカー部。北東北初のJリーグチームを作るべく、2010年にクラブチームへと移行した。

代表取締役社長を務める岩瀬浩介氏は、もともとはTDKサッカー部、そしてブラウブリッツ秋田で活躍した選手だ。クラブチームへ移行して間もなく現職に就任し、クラブの経営安定化やチームの強化に取り組みながら、スポーツの力を生かした地域活性化にも信念をもって取り組んでいる。

スポーツの力で地域活性化に取り組む

クラブチームの誕生

今年9月にはクラブ設立からはや10年を迎えるブラウブリッツ秋田。前身のTDKサッカー部がリーマンショックをきっかけに2009シーズンをもって事実上の廃部となったが、民間のクラブを発足させ移行する形でその魂は受け継がれた。

私は2007年に行われた秋田わか杉国体の強化指定選手として国体前年の7月にTDKサッカー部に移籍しており、その後も同サッカー部で選手としてプレーしていた。本来であれば国体が終わればお役御免で契約満了となるところだったが、地元商工会や企業、個人で構成する後援会組織が資金を集め、国体強化選手のその後の活動費用を直接支援してくれた。

TDKサッカー部では「Jリーグを目指す」という言葉はご法度だった。なぜならば、サッカー部はあくまでも企業の福利厚生の一環として活動しており、Jリーグとは無縁のチームだったからだ。それでも、国体強化がきっかけとなって2006年には全国地域リーグ決勝大会を勝ち抜き、当時J2の一つ下のカテゴリーで



サポーターの応援が選手に力を与える

あったJFL（日本フットボールリーグ）への昇格を果たした。

クラブ化の動きそのものは、「いざJリーグへ」という期待値が高まる一方で一筋縄ではいかず、Jリーグを目指す上でのハードルはあまりにも高かった。それでも、不況の煽りを受けるなかでTDKがメインスポンサーを引き受けてくれ、選手の向出や社員寮の利用に配慮し、グラウンドや施設の無償提供などクラブ化に対しあらゆる面でサポートしてくれたおかげで、私たちの今につながっている。私たちは今日も「TDK」の名を胸に、活動している。

選手から経営者への転身 —クラブの経営安定化に力を注ぐ—

クラブ設立当初、1億円の資本計画に対して集まったのはわずか2,300万円だった。プロサッカークラブの経営ノウハウもないなかスタートしたこともあり、期待感とは裏腹に初年度から経営難に陥っていた。私は選手でありながら設立準備に携わり、その後もクラブの広報や営業も兼務していたため、クラブの不穏な空気を感じていた。

「自分が現役にこだわるよりも、クラブの経営安定化に尽力した方がこのクラブのためになる」、こうした思いから早々に引退を決意し、クラブ運営に携わることとなった。そしてそれからわずか1年も経たずに、外山純前社長の後を引き継ぐこととなった。

リスクを背負い社長を引き受けた理由が二つある。一つは、秋田に来て間もない頃のこと。地元の青年会議所がJリーグ創設者の川淵三郎氏を招き記念講演を開催した。川淵氏は講演の締めくくりに「私が生きている間に秋田にJリーグクラブができることはないでしょう」と言った。当時私は秋田に来てまだ3カ月足



PROFILE ▶▶▶▶▶▶▶▶▶▶

株式会社ブラウブリッツ秋田
代表取締役社長 岩瀬 浩介

株式会社ブラウブリッツ秋田
秋田県秋田市山王3丁目1-7
東カンビル1階
TEL 018-874-9777 FAX 018-874-9778

らずだったが、一人の秋田県民として憤りを感じたことを今でも鮮明に覚えている。もう一つは自身の体験だ。茨城県鹿島地域で生まれた私は、鹿島アントラーズのお膝元で育った。チームの発足から街はみるみるうちに変貌をとげ、スポーツが地域を変える大きな起爆剤になることをこの目と肌で実感した。

必ず秋田でもできる。実体験と確信を強みに、私はとにかく営業に奔走した。

支援を背にチームが奮起

クラブの運営に対しては、多くの方々に賛同いただくとともに、支援の手を差し伸べていただいた。経営が安定軌道に乗ったのは、2014シーズンにJ3リーグが立ち上がり、ブラウブリッツ秋田が初年度から参入することになった頃だった。Jリーグでは財務・人事体制および組織運営・法務・競技・施設の5項目について厳格な基準を設けており、こうした基準をクリアすることで経営体制の強化が図られていった。

この頃から、チームの強化にも本格的に力を注げるようになった。プロである以上、勝たなければ何も始まらない。2015シーズンには終盤にかけて13戦負けなしの記録を作り、翌2016シーズンにはクラブ史上最高順位の4位でフィニッシュ。そして、2017シーズンにはリーグ初優勝を成し遂げた。残念ながら、当時は秋田県内にJ2規格を満たすスタジアムがなかったため、チームのJ2昇格は叶わなかった。しかし地元有志や後援会が中心となって集めてくれた18万人の署名が大きな原動力となり、秋田市八橋運動公園陸上競技場に照明設備と大型映像装置などが改修・設置されることが決まった。これを受け、暫定的ではあるが、J2規格を満たせることになった。

スポーツの力で秋田を元気に

クラブの価値はどうしてもチームの勝敗で判断されがちだが、プロクラブの存在意義はそれだけではない。

いわせ・こうすけ

1981年4月8日茨城県神栖生まれ。ブラウブリッツ秋田の選手として活躍後、現役を引退してクラブスタッフとなる。その後わずか1年足らずで社長に就任。2014年のJ3発足当時はJリーグ最年少社長となった。破綻寸前のクラブを再生させ、2017シーズンにはJ3リーグで優勝を飾る。このほか、秋田公立美術大学特任准教授を務める。

各Jリーグクラブは育成組織を持っており、地元の子どもたちを育成している。小学生年代・中学生年代・高校生年代の3つのカテゴリーを保有して一貫した強化を行っており、その成果は確実に出てきている。

また、地元の子どもたちが地元で夢を叶えられるという環境は、秋田が抱える若者離れや人口減少問題に、少なからず良い影響を与えるはずだ。さらに、秋田の魅力を発信するためには秋田に来てもらうことが必要になるが、そのきっかけにもなりうる。サッカーは各チームに熱心なサポーターが存在し、敵地での試合にも多くのサポーターが応援に駆け付ける。J2に昇格すれば年間1万人以上、J1となれば2万人のサポーターが県外から秋田へやってくるだろう。

この他にも、サッカー少年団への巡回指導や学校給食への訪問、夢を叶えた選手たちがどう挫折を乗り越えてきたかを伝える授業を行うなど、子どもを対象とした活動を行っており、その回数は年間200回を超える。道半ばではあるが、「ブラウブリッツがあるから…」と感謝されることも増えた。「スポーツの力で秋田を元気に」をモットーに「スポーツを通じた街づくり・人づくり・夢づくり」の実現に向けてまい進するブラウブリッツ秋田に期待したい。



小学校での特別授業
選手自身の言葉でこれまでの経験を語る